

私のオピニオン 笹谷秀光

Hidemitsu Sasaya

株式会社伊藤園 顧問、CSR/SDGsコンサルタント

「JAこそSDGsの実践者ではないか」と語るのは、企業や自治体にアドバイスをを行っているSDGsコンサルタントの笹谷秀光さんです。国連が掲げた2030年までに政府や企業・団体が取り組むべき17の目標がSDGs（持続可能な開発目標）です。なぜ、JAがSDGsに適した組織なのか。その理由とSDGsに取り組む意義について、お話を伺いました。

加速度的に変化する世界において、 不透明な時代のよりどころとなるのがSDGsです。

■ 持続可能な社会づくりの「羅針盤」

「SDGs」という言葉を見聞きしたことがあるでしょうか。「Sustainable Development Goals」の略で「持続可能な開発目標」と訳します。横文字だらけで難しい印象を受けられたかもしれません。外国の問題と思われがちですが、読者の皆さんにとっても決して関係のないことではありません。混迷の時代を生きる上で、必要な考え方、大事な行動指針です。SDGsは私たちの問題です。つまり「自分ごと」として「当事者意識」を持っていただくため「SDGs」を分かりやすく説明します。

SDGsは、2015年9月25～27日、国連本部で行われた「国連持続可能な開発サミット」で採択されたアジェンダ（行動計画）で、2030年までの国際社会共通の目標で、具体的に「17の目標」と「169ターゲット」を設けています。途上国だけでなく、「世界の全ての人が発展するためにはどうすべきか」という普遍的な課題と捉えられますが、私はもう一歩進んで、「持続可能な社会づくりの羅針盤」と考えています。

21世紀に入ってから、世界は加速度的に変化しています。政治ではナショナリズムが台頭し、経済は国境だけでなく、業界の境界もなくなり創造的な破壊が起こっています。社会的には、中所得層が崩壊し貧富の差が拡大し、若者と高齢者の世代間の断絶も懸念されています。テクノロジーの進歩は目覚ましいもので、ICTで情報は一瞬にして世界中に伝わり、AIやロボット、サイバー空間など、少し前には考え

られなかったことが可能になっています。

人類史上類を見ない不透明な時代において、何か頼りになるよりどころを世界中が求めていました。2013～2015年の3年間かけて、国連加盟全ての193か国が徹底的に議論して、まとめ上げたのが「持続可能な開発目標（SDGs）」です。

■ 世界と地域社会を変革するストーリー

「羅針盤」は、5つの「P」を頭文字にしたキーワードで成り立っています。まずは「People（人間）」。2番目が「Prosperity（繁栄）」。3番目が「Planet（地球）」。4番目が「Peace（平和）」。最後に「Partnership（連携）」です。

SDGsの前身にMDGs（ミレニアム開発目標）がありましたが、途上国の支援が中心でした。しかし、突き詰めると途上国・先進国に関係なく5つの「P」が危機にひんしていることが認識され、SDGsへと議論が集約されました。この危機に対処するために設けたのがSDGsの「17の目標」と「169ターゲット」です。

私たちの暮らし、農業、JAと関連付けながら5つのPと17の目標を考えてみましょう。まず「People（人間）」が尊厳を持って生きていくため、「貧困をなくそう（目標1）」「飢餓をゼロに（目標2）」「すべての人に健康と福祉を（目標3）」「質の高い教育をみんなに（目標4）」「安全な水とトイレを世界中に（目標6）」は、国・地域に関係なく実現しないといけない人類共通の普遍的な価値です。さらに、「ジェンダー平等を実現しよう（目標5）」は、女性への暴

行・虐待は絶対に許さないという人権尊重の意識が世界中で高まっています。「#MeToo運動」などがありました。わが国は世界経済フォーラムによる「2018年版ジェンダー・ギャップ（男女格差）指数」が149か国中110位です。

「Prosperity（繁栄）」では、まず「働きがいも経済成長も（目標8）」があります。人間らしい働き方のできる職場の実現を目指して日本でも、政府と民間で「働き方改革」に取り組んでいます。「産業と技術革新の基盤をつくろう（目標9）」では、社会を良くするイノベーションをもたらす農業を含めた産業基盤の実現が求められます。人工衛星など最先端技術を用いたスマート農業の推進が当てはまります。「エネルギーをみんなにそしてクリーンに（目標7）」と「人や国の不平等をなくそう（目標10）」も大切です。しかし、海外の自国第一主義を掲げる政権では、温暖化対策に背を向け、差別的な移民政策を取るなど、気掛かりな事態が進行しています。「住み続けられるまちづくりを（目標11）」では、JAの皆さんにとっても、中山間や過疎地の生活インフラや条件不利地での営農など、地域社会や農業の維持という身近な問題が当てはまります。

「Planet（地球）」では、「つくる責任 つかう責任（目標12）」「気候変動に具体的な対策を（目標13）」「海の豊かさを守ろう（目標14）」「陸の豊かさも守ろう（目標15）」の4つの目標が反映されます。農業は異常気象の悪影響を最も受ける産業です。フードロスの問題は、農業者は当事者として解消する努力をしないと いけません。また、2020年の東京五輪の食材調達に合わせてGAP（農業生産工程管理）の

図1 SDGsピクトグラム



導入は可及的速やかに取り組むべき課題です。

「Peace（平和）」は、「平和と公正をすべての人に（目標16）」で、公正が確保されない社会では経済は発展しません。「Partnership（連携）」は、「パートナーシップで目標を達成しよう（目標17）」で、協同組合が本領を發揮できる分野です。非営利組織の協同組合間のネットワークを活用すれば、日本社会に新しい価値が生まれることが期待されます。

このようにSDGsの17の目標は、世界と身近な地域社会を変革するためのストーリーとして相互に関係しているのです。

SDGsは世界の共通言語

私は農林水産省で中山間地域対策や国際交渉などを担当しました。行政経験を生かし、新しいことに挑戦したいと思い、退官後、CSR（企業の社会的責任）に力を入れている飲料メーカー、伊藤園に入社しました。経営理念「お客様第一主義」を実現するため、寄付などの一過性でなく、企業の事業（ビジネス）を生かして、経済価値と社会価値の両立につながるCSV（共通価値の創造）に取り組みました。

SDGsは慈善事業でなく、貢献を世界に発信し、本業の競争力につなげ経営の発展に生かすことが重要。

SDGsの「17の目標」と「169ターゲット」の和訳は国連グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパンのHPを参照してください。 <http://www.ungcjin.org/sdgs/goals/goal01.html>

協同組合精神で動く J AにはSDGsの理念がビルトインされており、存在そのものがSDGsです。

伊藤園のCSRをSDGsに照らしたところ、17の目標全てに合致しました。ちなみにSDGsは義務ではありません。政府、自治体、企業、団体がやれるところから取り組むもので、企業の場合は、慈善事業でなく競争力につなげることが重要になります。日本でもSDGsを経営に生かす企業が増えていて、企業には「SDG Compass」という行動指針があります。事業とSDGsの17の目標を関連付け、優先課題に取り組みます。

伊藤園は緑茶事業のバリューチェーン（商品企画・開発→調達→製造・物流→営業・販売）に沿って展開しました。SDGsの「ピクトグラム」をご覧ください（前ページ図1参照）。自治体、J A、契約農家と一体となって、耕作放棄地などで栽培した茶葉を全量買い上げるなど、「茶産地育成事業」に取り組みました。これは「目標2」であり、地域おこしとして「目標11」、そして連携でもあるので「目

標17」に該当します。製造過程で排出された茶殻のリサイクルは「目標12」で、カテキンの健康機能の研究は「目標3」です。また、東日本大震災の被災者の皆さんのコミュニケーションの場となるべく仮設住宅で「お茶っこ会」を開催しました。これは人同士のつながりを生み「絆」や「結」^{ゆい}をもたらしました。パートナーシップの構築なので「目標17」ですね。さらに、SDGsを通じて部署間で情報を共有すれば社員の一体化や意思疎通を促し、商品のレベルアップが進む効果が期待できます。

今やSDGsは世界の共通言語になっており、環境配慮や労働人権などSDGsを意識した商品には世界の消費者が「いいね」を与え、一気に伝わります。国際基準で評価されると企業価値やブランド価値が高まり、社員のモチベーションも上がります。同じことがJ Aにも当てはまります。J AとSDGsの関係についてお話ししましょう。

図2 SDGs目標2を基軸に



※各目標の図版は国連広報センター。考え方の整理は笹谷氏。

まずは食料安全保障の確立から

J Aは存在そのものがSDGsで、SDGs的な組織といえます。協同組合精神で動いているJ Aは、もともとSDGsの理念がビルトインされています。J Aがこれまで地域社会で取り組んできたこと自体がSDGsそのものなので読者の皆さんの中には「何を今さら」と感じている方も多いと思います。しかし「見える化」して、打って出る必要があります。SDGsが国内外の消費者に浸透するにつれて、J Aの存在意義を磨き直すことに役立つはずです。

J Aと最も関わりの深いのが「**飢餓をゼロに**

(目標2)」です。「目標2」には具体的な「8ターゲット」がひも付いています。中でも2.1「すべての人の栄養改善」、2.3「女性、家族農業など小規模生産者の所得倍増」、2.4「持続可能な食料生産システムの確保と強^{きょうじん}靱な農業の実践」の3つのターゲットはJ Aが果たすべき役割です。J Aは結束力と底力のある組織です。グループが総結集し、得意技を使えば、「目標2」の達成を基軸にして、SDGsの17目標に貢献できます。食料安全保障の確立が一丁目一番地の「目標2」を実現することで、他の16の目標に影響をもたらす好循環のストーリーを展開できるのです(図2参照)。

SDGsへの貢献を世界に発信する

日本には「三方よし」という文化が根付いています。黙って善行をすれば分かる人には分かる。結果は後からついてくるといふ陰徳善事を前提にしています。この考え方は時代遅れで、中でも若い世代や海外には通用しません。国際指標を使って進んで世界に発信する「発信型三方よし」が大事になります。SDGsへの貢献を発信することで国産農畜産物の輸出を拡大するチャンスになります。また、J Aの地元での信頼感を高め、経営の発展につながります。

ささや・ひでみつ

1976年東京大学法学部卒。1977年農林省入省。外務省出向(在米国日本大使館一等書記官)、2005年環境省大臣官房審議官、2006年農林水産省大臣官房審議官などを経て2008年退官。同年株式会社伊藤園入社。知的財産部長、経営企画部長などを経て2010~2014年取締役。2014年7月~2018年常務執行役員CSR推進部長を務める。2018年5月から伊藤園顧問。伊藤園は「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」を受賞、経済誌『FORTUNE』2016年9月1日号で「世界を変える企業50社」に選定され、2017年には政府の「第1回ジャパンSDGsアワード」で特別賞を受賞した。現在、ブランディングの向上を通じて企業価値を高めるための理論と実践(CSR、CSV、SDGs)についてのコンサルタント、アドバイザー、講演講師を務めている。日本経営倫理学会理事、グローバルビジネス学会理事。主な著書に『協創力が稼ぐ時代』(ウィズワークス)、『経営に生かすSDGs講座』(環境新聞社)など。
笹谷秀光公式サイト <https://csrsdg.com/>

